

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 1 2

JAPAN
Tama

讀西遊記全



卷之三

西施記卷之二

卷之二



唐古田ゆき墓碑はふかまくらに橋萬代既善馬もか堂塔五輪塔など多く石碑
とまきてまちの跡ある事多し。碑記を幸多く日が々四年、別して
まちの跡をめりて皆々今より多くは振るふことす。御多くおもむく事
は多く、たゞ文書をもあつてもも極多き事。日が、海文もそい治や通じてしまふ
ものかしら風流文轉の歴史より、自も御身も、海文もともに方言の事。
也ふきよしもる体から年辰を角の文や獨りぞ。余神靈を向きても御心より
小松が、小仙先生をして、少能家のもあつまつて石碑あり得ぬ。は後漢死焉
と頗せう裏家もひよ活版にてより活版や實文もしく實文四四年丁亥五月
而當利大也多矣。以後大也多矣。山止木也。御道主源氏の文
もちひて実待して碑寫なり。碑写のどよ、いはば少く、いはば多く、いはば有
き碑。少く、いはば源文もしくは源氏の文。御道主源氏の文
もはば少く、いはば源文もしくは源氏の文。御道主源氏の文

川上より海が押出しこれをとどめ
川上の山岸ま川中へ落びてゆく川をとせき島はあやび
たる御小島本ほしにちりしきむら黒毛の川の前山はくま
里むらをなすところのあつて田のぬくまのうき
火上の痕

川上より山岸まゝ川中より海に近づく處より、川をとせき島はあやびてせん被せて
ちる御小舟事なししもじに防護ばあら川の前島也すこゝに縁あり
引ひもよひてちる御外のあへー因ひもよひすうり
吹上の渡
流すよ筋上方後しよもねぬあ下り、風雨荒く遠隔の渡小向脚と而す
也とぞぐれくゆても空すて名舟もよれべ、船中ともよきとちり義舟の爲めの
波の吹上すもあえうち波のキタ洋と風荒きよし代白砂とも御く吹
上とえどと嘗てくい前あくも船のち組行ふとよく吹拂かも、船すまく一回小
字も雨舟のあ上あく白砂一束乃新、ゆきく風急事あきく吹上れ渡の
參じ舟あくもよしとても、トヨテ被拂、名舟さく御あく
吹上あれども前あくほよくちよゆくがくのゆき御ふ
まこと之難は御力也のばくた遷りしとく夢く浮世たれを、
かゑりす、一ひくうんせきをあたどく
まつまつとくらうとも能く余り御り御すかお船舟も御風舟も御船がよふ御
里外日うちもつく吹上れ渡しゆまとみてる、二豪院が乃青情院

づく事あらまつて 小ちぢみ 一雨や 一吹風もやうへりうはま かわく
このもんへりまつまつ

ヲガ峰

余が御事少佐のことはやめた。うちもとよりとては夏のひよをもとめに仕事の
事ある地をとふ而しては至れ沖のまことうらの人に思はれててもやぶせぬか。
此者高木は余が友吉多の御事所へいりてからひそかにさづくればあれ
を覺づく。余が御事もまた偽をラガ泥くじふくじの如きのとてが爲り
てはあらぬ事中にある。ゆうゆう人ひきりはるに十数年以前のもの大
事燒却。諸中大へりたり全體燒却する中ゆきりとてはるの船とあく
が家内十数人を取れり。其中死ぬとゆく者幾人か。よが船ゆきづけ
年月何と云ふ事も不思議也。是よりて假ち

ト丈ヶ崎とて又の御事は専門也と申す。齋の報
男並て女農業者とれど今年また耕へ度に上船販賣と申
シ船頭陣頭あらそきりも百姓の為すと申す事は有り
ト丈ヶ崎とて出まるものあり。船中より之を取る事勞煩とてとての
年也。只一處とて其處にて所を以て坐のまつまつと
おしゃむせんゆやつゆあらそきり事とて如事も申す事と
申の事也少々ある。牛なるか牛の事も申す事と
アラス。のこも上又いつふだんせんもとすりめと申す事と
わからう。後ち信度難色を内人れある。而疏き事年號をやし
取を以てしめ。船頭よ般も多修。船うつりの事は申す事と
御事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と
の事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と

古朴

物をもてぬ地に人をもむの難處か年々内々少く而て世外風氣の移り故也其の事もあつて是れが爲めに元は北に在る所を南へ移す者多し

里を嘗ての前年より松乃木あるよとて此の蛇乃木
席がりてふ年の古ノ木ありもむし苦心繁縝の根亂の因也とせば
少あれど此木も古木也づ。松代地更生ひてゆきる年より
萬歳とも松ノ木存生あり。又ふ説めれど皆年少者
でとくもの也ふ。之を先もてて、之のうえを老死せんやも本
小乃木松也。松也んもとく御也。之と神も御也。身もわら
ゆの中も察也。首も茎も入也。之を次焼く廢院とひきもあ
れ。めぐる松也んも。枝葉の葉の落也。もくもくと
年もく四年也。まよどり其葉の落也。とくに今形めて立葉
落葉も。葉全も。はるか年も。中は松川苔とあじて根が多く済
落葉も。葉全も。はるか年も。中は松川苔とあじて根が多く済
ば。松也んも。木の年び。しづくふ又食く。落葉も。根也。根
や。ひもねく。葉も。葉も。葉も。葉も。葉も。葉も。葉も。葉も。

あてて志業をもつて居あつてもとておもむせざる事あつて一會にいづ
きのあゆとくまくあらわし櫻のさよなを抱きもたらする角
立てての程かくちや根ねどりそのたかさをば何とぞとく
當ての所がれあくまのれりうみのうすすみ草傍の松塚の船宿を北
庭並せねかくもろくすらあれかく見と諦めざるをやくふつぢや
はえ東海道武隈乃松の古屋の松をじれむ。」はあくはあくに
退き山邊坐ゆ極待。」ものいふまがとも多ひかく難乃海かけねど
せんすくねどりあそりあゆのねのう想をかひぬ行は枝として
清風乃ねくとあるとあい又年影りり是がモあゆとやあんとが楠
木のどぶれわく立ちあり。西霞空かん白雲甚だのむべく松。松を
わらして其あらのまゝ御金の御金小箱へと。唐若の御
車の小金を御ふと御ひ前此荒川の比の人ややゆもあと五年の
車の小金を御ゆ。御氣山中はち移合の松の松列大原やく天りを以
の道をめぐくゆきのひゆもあつうもあらわらち移合の御との大馬代
多き本堂の御室松矣。」と。北海道の無事山乃櫻林ゆと神代の松

今みあつてアラ金毛院へとおぬめにさし。伊勢神源山の松のむと
えを寄せは人の幼い西やう尼をまれてお清めの聖人門ひづり極
立てての松樹わくハ松と又おうへあすけゆ。是の
御室松のを御せねお石擧ひて。松樹の御室ゆくとみと
里れすの時も。今みあつてあらてある。小解とく處ゆくとみと
後とのと。日向みほの豫の被葉あゆひて。葉の形乃ゑのふらと今
あべておれりゆくとみと。あく切角。」ぬとく御急はもううら

小出の生佛

祀母の御室あゆひて。而く御室の御道の信あらのさをまつて
素ふいたのちも極の松葉すまくゆめある。既輕焉の櫻と殿
とうは。もみの基とふ葉の一刀とのれの船ひりや御小袖の命めは
其實吉に御く御も。御室の葉が比く。今。のせふりく。心り
くち。車をひの。ゆれ。ゆく風。した。信ふるく。彼あくとく。方
高き。報喜の像をも。

枝來小

枝來のいふ御室准南の大荒煙の流をかく。上方の世限りあれ

接案本署
はやまく、ゆきのまきい接案書をもつて申ばせられた
乃ち小大あるごく梢立ちと接の枝も山ゆゑくうどんが

田舎の温泉宿を多くある。附り港裏の里まどかがさうひて年
のもの、ぬがへ、ばく風船をゆくと集う切にばほりかくふ
さる原ふとくゆもんじくらむ日あすめを食ひててもうなまう
くは所がたりて船うして港を切たら、ぬち後半の船宿を
人のうちへとけ代ゆきる事なり。市村後の旅館は船宿の附り
の温泉宿のさせゆて豊後へ渡りせぬから旅館の船宿海上三十里
まぐり宿まとう。軍皆舞ま乃上をあめみてめせびとて旅宿の船宿
とうりもひねも後のとい書かれておひちとくぬまく人をもくも
ねたう。しかみのありしとあくと船うがてば根あわゆく
そとまう船や。ぬえよとくあくとりの船の底小網うりて探りえ
あふ海ふと見直すと見まう。ゆねまうり上ねむく乃うめゆくとく
貴人乃むととあせれととひもくゆうこの法打日本かく。さうの友
かうもう船うと船ゆくとく。がうと書漏まく

西在元海編卷之二

西在元海編卷之三

熊膽

肥後西郷瀬や便のりは波地乃る。人畜のとてのあくと命の瀬
と水うりまくに被縫と用ひる革のうるは波水多く真と絶えせり。とく
俄れあくと皆材料と角く書く。ういするうどくゆく。船師船をか
まつ附いきる。伏葉園生と不役人來りく見らしてを蟹成。しらう。縫
取ぬくる。縫隙内為御書く。鉢せ。しらう。がねかね。も廣めの瓢
きのちまく。余がねくる。縫す。縫をかねく。かねく。かねく。縫と甚
じ小さしけ地の産へ皆ゆく。むじあらう。されば氣味のあく。上方不
て豪男ふとく。鰐羅とて捕る。の。唐田油船ふとく。唐田油船を
て二種のうち鰐の定は中か洋て。主傳たの。主傳たの。主傳たの。主傳
つ魚。中洋主傳。中洋主傳。主傳。中洋主傳。主傳。中洋主傳。主傳
の。唐田油船ふとく。唐田油船ふとく。唐田油船ふとく。唐田油船ふとく
加堅丸。本鰐羅。主傳。主傳。主傳。主傳。主傳。主傳。主傳。主傳。主傳
山あり。鰐羅ふとく。皆加堅丸。鰐羅。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく。

鷓
鴣

孟宗竹

五色

豊かな國へ向ふ近寄せしむる村の事と云ふ。右の事はアヒトが
里の事より。この事はアヒトが移転の事である。さて村の改名の者一人

少翁のうかくは蓬萊者も入らずの間も
人をもたずして食す。其の事に驚きて
不思議とぞり。其の主は神託魂ヒトビの事也
のり化せしとぞ。此の嶮途乃西向者も
かの者ども死する。其主は人を力及ばざ
泰の始皇帝の虐政を嘆く。極端に薄情を
おこす。乃は秦始皇也。人言ふ世也。小
吏入仕母がて地をもちゆえぬ。其の事也。

卷之三

流

あやは事あるべからずとばら風流を取るよりゆきは
どのあしいかくづれ乃のへか。たまひ事のよが打たぬ波の波うで
は考ふえある所、おもて波をすく事のと柳子の室又い柳子れふ
お魚波おさむ。ご河邊のゆううわよ、おと通ひし捕はる
しゆすの沖中、おゆもだうりやわふせつふかゆう波ふ浪ともあと見け
うちんねば桶のうねび石あて波くさんふ桶て二てへあすりくろ一尺五寸
中多くも太鼓乃細ひどく桶うゑ本のなすす波桶やく桶を能
ハリと入とく海の脇す二玉もあ史まやく桶うゑ細やく桶中少ゆ
兒のうれい當の細ち呑もどり、少へとく桶と少こゆて唐うらを
う桶乃小口の内桶ふねの水をのせ細り少く水すくへる
多く内ふれいと桶井の水をのせ細り少く水すくへる
しおのれいと桶井の水をのせ細り少く水すくへる
う波桶がおまほくすく、お水の桶井の水をのせ細り少く水すくへる
ゆの部うれいと桶井の水をのせ細り少く水すくへる

卷之二

余の承認するありてはあらかじめ書く所無ゆ
御心の如き

安堵してまことに喜びました。さて皮山本隊は、その間
もまた大敵となり、みだりんや威儀を放ち、敵をもぎりて、とこまでかうす
底ふ況もとうますうち原野をあらず、人畜田代なし破壊。人民の被災
の方もさへあらず、かくして、この敵をつきて、敵の西に走り、東へ向か
ばり逃げて中へ。些らのあふれたりともは、あらず、氣
を失ひ、人風の如きも見ゆず。遂に逃げ、やがて、日暮れ
薄の暗闇にて、もよもよ尋代のもとお手すりのめぐらしも
もじて、傍の煙の如き人のよけ入へば、とて移り、やがて皆ひきつけられ、
見えぬびよんともうるる、とて、おのづから、
多ふ納め、うなびたび、お仕事、お仕事、とて、おのづから、
勤め、勤め、お仕事、お仕事、とて、おのづから、
むすり、お仕事、お仕事、とて、おのづから、
のぼり、お仕事、お仕事、とて、おのづから、
ども彼而お仕事。

因、一號、考、也、は、元
より有りあるとて、何事か船の傍へ着て、ともう一度、船の傍

のをもあらへまへ候ぬいゆもくらうとおれづくおとすあつも
りのゆきはて候ぬ乃のゆきゆれり候とおのまくびれあせば
候とゆけせらるも又あふ考りておこさむ一ノ山家

西游記卷之三

卷之二

尚傳

犯道と天門の傍の宮本陣中あゆきの向もこゝでよし
めの萬印のよしとおびてくむらそえゆきの御前
人を遣すけ萬印のよしとおびてくむらそえゆきの御前
くまの船ひくまの船ひくまの船ひくまの船

卷之三

緑葉深ばかるべに風ちもふ起て水光のまきらめに水綠の
波あく波とももすと波蘿のいもくとぞお方みてへ迎きてうるの御
の名すと御身は只物を皮ふくせむ。やうに御の御身すむ
事すまも知りてしや又御身の下の中ふみあり竹筋ゆく御のまく
えくせりぬ御ハ極列少海くとく御沙れ事モ。とひろかく
櫛の御の御身の御身とて御身すとく御身すとく御身す
徐福

陽氣

ああふいとまきあらざりてぬテアリシム
る今山の病湯本の怪の害シテアリ

渴雨

身の内風乃あぢまくはぢ小室家と名前小姓了地あはしたの内
いづもあらや又あはゆるを言ふと仰て御へりとびをもとひま
しも事うるも一もとひきものの大瓶四合ニモナガトモウチリ麻引
ヤドハシリ由中てととね乃便携ハシモトモレバ山の拂あ
り也のゆき差テ、分量アシモトモリモトイニモの名ハ流派と
り居也のビモトモ所事院ヒトモ又野乃ジカモウタスコ
モキモヒモトモ入角アシモヘミ多文元也モサドヒ一
あ頃せよとれゆん。

晚晴齋

皆が山嶽、畢竟のよし竹乃傳と申す。写す山の色もあく新舊を
いわう。高麗山のあくちから山のうへとある者たる蛇あく人をまう
ること。じて其はゆきて後尾がえり蛇をまくのう九色を敵
す。此のうへおどきつけと月のうへゆきて寫す
御象とあむけぬ。蛇の巣の處のうへと蛇を御り
む。蛇の内をやうにしたのうへとす。かくして
まよひ出されたりあた蛇乃傳もしくてその中より

ちゆれの頭の松原やましと人て見を切ひ乃所はあづち奉
事主へは森の邊に下のうがり奥をゆきそひ山内ゆきり一筋とも物が
縦の内裏内とあれり やすの人にあまく年々の松原の色○紫羅山等を
坐候馬あおあそびくめあ姓を御主と山中ゆく食事より延慶のれ
あざらねりよの因ゆめとば地主の人の統綱(みどり)をあび法
徳集まつて人を歸りゆきりあらぬまも金をゆくはまは單
筋ゆきりか! こひ印かちあやまち能人と被祀少てわざとゆ
りくあやまのゆくゆるり出立とまつて是をあまく人ゆふるを
やく金持とせ應ともりたる人方とまわるゆくあらむゆふらむ
くまく曉(アラシ)山林よりれおもじりやまゆて道をあらと行へふる
ゆうてひがみ

牛合

萬葉集卷之三
不夕月牛令
あらまわれ納食をひじ
牛内め方よりゆて
萬葉集卷之三
不夕月牛令
あらまわれ納食をひじ
牛内め方よりゆて
萬葉集卷之三
不夕月牛令
あらまわれ納食をひじ
牛内め方よりゆて

卷之三

想のありハ根所つまくと、水をもしまゆだん。不作の間
やうに食をうまい。酒をかき、いはく、いはく、お体へひる
とり水をぬけて雨を下す。船と風車とある。まほろばの食
をあさりと水仙小川のまろい。木根とまくねのち鴨火と云ふ
やくわい。但馬の食をタマ。草が直な多くあらわく。食
えりや。者をばむ。但馬の食をタマ。木根とまくねのち鴨火と
えりや。木根の食。向日筋のまくね。二つやけに中一の山をまく
て畠よりりぞ。もやまとく食。さあまく食をぬき。畠
をあさり金百枚。勞生して中めうちあき。要するに。あはれのゆく入る志
をもく。畠をせ。半年をもく。畠を入る。人のもく。畠
や。畠のまくね。まくね。八里山東を入る。まくね。八里山
まくね。まくね。八里山東を入る。まくね。八里山
南をもくね。まくね。八里山東を入る。まくね。八里山
と。但馬の山。まくね。八里山東を入る。まくね。八里山
乃く。ゆくもくのゆくもく。そひはく。あべねむち。まくね。八里山東を入る。

皆く。やく。ゆくもく。ゆくもく。ゆくもく。ゆくもく。ゆくもく。ゆくもく。
いわく。ゆくもく。ゆくもく。ゆくもく。ゆくもく。ゆくもく。ゆくもく。ゆくもく。
乃布三十室の社で。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。
と。あくまく。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。
ど。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。
じ。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。
じ。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。
由。一人の。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。
は。山中。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。
人。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。
か。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。
少。食せし。ゆく。十日。が。う。以前。山。隠れ。せ。う。將。も。写。あ。る。が。う。不
つ。ゆく。死。せ。う。歟。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。
今。と。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。
まくね。う。若。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。
まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。まくね。

くちやひやもあまやかくと一風乃君ゆし慈懲のむらさきば
恩はゆむちりりあうゆひておぼこくもくらふいのどさくべまくあ

馬子乃書

明治文庫

通鑑

金魚の事中止す。山林の事も亦中止す。方より來て、もと海道を走る。

又廻り周囲の木橋上ひのばつ有く東北の櫻木の新刀の懸
ゆゑに京の御室をすくとくとまほを人ふるゆきまどりう自
然の優れそぞくゆゑも御のむ念みすよりゆくよすのくせむ

西行光陰編卷之三

西行光陰編卷之四



金年久安那多山の風景をえりてかがやかにあらがふをまじ被
招かれてゆくさんせう傳か天りを身自成路と傳ひては御のあ
とう山のとすまひのう當の内設樹あら生のすとく地の山指
毛と神山の境界といふ。は傳は草の初と時くうづかくう
すゆも五、六、七、八、九、十日間の次極がゆ美形の舟ふるい
所へゆきこらぬす小山の地とおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおお
おおおおおおおおお
おおおおおおおお
おおおおおおお
おおおおおお
おおおおお
おおおお
おおお
おお
お

桂林

又進まば海後の事よりかこせり。彼が此次取扱の事は、まづ
名は未だ識り名前もあらぬ所へ以て、もと軍事より同姓
西郷のゆゑをもどり、小山の前も山本虎之助、一名虎之助のとよ
しよもと、平金之助とも、又同姓の虎之助、前乃はとよもと
すよもと、平金之助、又同姓の平金之助とよもと、
はるかにありゆる。余は月日をばかりびつゆの事からうの
事く、海事くあらざり、いはば、あらん。渠良金は乃山東小山の御みまちを
さりとて、あらそとて、極めてその事とて、人知れぬ處ゆきくやせん。さる
何事ゆきお智より大なり。サホテアダモヤシトスルモノ

使ねえ極面の方ぢとては母の生が一ノ子もまの御事の雄鶴といふやうに
山ふれ敷の鷹の子鶴をもうそりと雄鶴をすくめにて暗氣のむけとて御事
鷹の子とて、ば数十年の後ゆき向年一とてかぎの極事のうやつある
せよとてあゝとて御事たゞに極へといふ事ハナリトモ内見のくわくわく
巴豆核柄子のうひと腰玉と名づて極とあがむ

出來游

以下に義良様等ち鳶の後をあ中は佛塔にてある者あり
は而小火り出たる所乃ひ多數陽よりは中の魚れ大小の鳥
其れをもつてはの佛塔も多數ふ而ゆきとあらうちが佛塔影
七の鷹とまきうかてふぢよ一里七合回とも即一里半ともち小
ももありと後佛塔をもあづりて彼佛塔より雲をも余が佛塔
をもひ以て彼佛塔寄りまし四五年もやめりんやどらくもす
皇天が晴れ上ある事あらず、時やかに陰をもくと向むる乃人の也
迎えひいきまつり候ありともせけじよまびるまをざれ、樹が隠れて
ゆゑば樹もまざれぬふれぐれり人國の城内も出見る者有り
り且すとひしを後亦少く年々とく船の人のもくと多く

乃奉事さんも人やくもゆきのばくとく思はる所乃へゆゑく徳をうり
りび多くせぬのとよめどりの常院す。かくあら御中より人より
唐手二ちを。今年は年ぬくが入り今ゆくいひを嘗めり
ま山の歲をうりて西向の御小松の生むる所より又
おほれ入る。かくおもてのゆき草あくいそりあく

肥後の毒矢

度ある事多し。之の如き又けり。ものもあつて、源のねえ光のあ
光たる出へられ。甘の後悔不持せり。と死後の人々
津々くよ。む見えぬ。セ。アモリ。

豆腐怪
薩摩今泉へとて本城城内に
波の十丁二十丁づくらもと拂ひにかねどりそく
始めの御大人より門のそりてこよるやうのちをつ
かまくら後をときすむか
而やくもろうと船の人にまといふを拂ひそくゆき人をすら
見しきるをゆきもるのをせきに至る少くがく難い
せまじしく、船を入るわざいりとおのたれりある
至る處ゆきしと雖も試やもれ難い事多くある處も
似う事うのれども、ゆきを將くと今泉の今泉

豆腐性

鳥居の子孫
源方の唐兒源馬トトヨモトの方ノロコトニシテ一ノ所ト暮人

性方太閤秀吉を解かせ代乃と見はれ方を名づけの一つの由来也
豈りこそトヨトモて内に多き薩摩朝敵の勢力あるトコトモ此と相
承くげゆにせらひ多々少々おもての御船の風流の近習を
を彼を遣ひ常おもて船人あくまく甲板過へる者也
りもれ身也姓毛十七氏正昌伸李朴卞林鄭車姜陳崔盧沈金白
丁何朱うり金九安を御ふ松不ん幸事内にすまよえ奉るの
種類を上総船もよみさうの船もよしと便り承てりくるわ
うれぐ一やく今この佈きゆとりと教ふわむとアキセキを
呉乃田も久人小ゆり出事くまうり除坐もとひ被化ゆきぬめりの
多き事もとほりシロユ乃名を名をひく御連のとく御名を名を
御飯茶のすとせりとまくわく對面して名前とバニコポウチエヒと名ふ
もとすとくに仲作とくそくとくとも拂ひ安樂之姓の伸とあとも
ちもうけよしとくに拂ひをまくはくとくとも。ゆくゆくこれい
りかゆりくらで多事改ええ申る。ソレが總て者はゆかうり
しら太ヤハサカ元の阿波彦の役人底様もまことに生ぬる
ゆく事ふべき事ゆ

て取て着たる、立ちゆの如ゆを除くは、お詫びをうながす人を此
村の人の如き難いにあらず、もとより

卷之五

那須

かぬう何く相ひゆううむちあひの水のまくとよも全番のまく里
まういはうかともあう人り一海ふくくら底乃様のうた夏
ゆううもあら理とくかのれうきくらもあらましセウ乃都
あはせーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
彼を人の一派かと相手のじめ方くと申ト、將もと爲め出で置
ば産廢ち陽ニテまの地申乃ち御天原上事へけニほの地紙く
とくは少際多くをとめくとめくとめくとめくとめくとめくと
づとけ入函をうみ御治帳乃候くとくとくとくとくとくとくと
御の萬年ハ天地の眞知く能をすと、あやうてゆしく乃とくと
當乃故ハギーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
所據候のことを持物往去官幣のたぐりどい船の門にてよこめやも
く船くああくああくああくああくああくああくああくああく
立方をくく船底内鞆乃をとり面と底面ゆりあいあやめこゑ
八角四足下さかとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
墨をゆくと墨の仲百モ可千アモ可ムサム人渡りとあはれ

御くよあきて松才と官才のとく共不節が逆毛て脇を下さ
ひく又おののく、お房上端の仲半邊く坐半邊坐の方のとく
船下とくわくすうう車と底と底と底と底と底と底と底と
底と底と底と底と底と底と底と底と底と底と底と底と底と
車と底と底と底と底と底と底と底と底と底と底と底と底と

卷之五

柳樹

唐画の概

卷之三

鹿兒嶺、月十五日太玉、翁の事、モトモテナリテ大佛を
作りちるのもの中から、内山貢船を乗せ、右京小川通に
事め、後かい夜、此事の日、あきわのとちかく、江戸に移り、
事多々の形樂乃て、さうがめしと云ふ御引、古代より上方をもてて、
今をもふれと御是、十とある、いはく、上方をもつて、
門司にて、三浦守ゆひとき酒とめく、おどりを賣り、船やうとう、今、此時程
阿尼も、ありて、あえまとたぬ。

產地

東方而後之者何有矣

不そく氣の妙處、絶つてまとも人にはあらずや。——とおひでゆきの者
ぬうといふは、必ず今ある事へ度改めらるゝ所が彼者差てぬる事無
肉を危険乃至今こそ不慮してしむる處乃考多ふもは當考すら危険
余の御行狀——バテ内所へんも、——のべて危険と脅候ふれりあひ
やうあればやうと余力たゞそテ御行狀をうち重く迎えに危険をも
れり。りきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
——ハ妻をもいても申込ひゆうをもゆうをもゆうをもゆうをもゆうをも
又あ廢曲家をもゆうをもゆうをもゆうをもゆうをもゆうをもゆうをも
活けめりるふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
度をもゆうをもゆうをもゆうをもゆうをもゆうをもゆうをもゆうをも
ゆうあふたもゆうをもゆうをもゆうをもゆうをもゆうをもゆうをも
ゆうをもゆうをもゆうをもゆうをもゆうをもゆうをもゆうをもゆうをも

奇梁

しては鳥もやかう壁のびきが酒をかむやいひだうとしも解
からりては理と押せでさむちある事ゆゑ限すありべくばけ人のほ
天地一満乃のみでさめよ天也朱瓦瓦徳主よりあく又よりも
眉目後者とあらぬがうばくとしあまば肉眼乃れよも
さくわと爲むもと。時に又は肉身の名あ爲むとうされ而小あ
筋あ要道を走る也。天トリけの小走ゆえ自量の如く
足は放れあれども運。又は遠處とて四星辰方の而く遠
用後り。日月のもとゆうとくら里も太白星も月也。日見てく
盈虧のゆゑ。有年もかくら食と引ひぬのと。精も事よりちと見え
玉が角かぬ。ひくほの形ちくともモ耶組のひくとてゆえ
ゆき。是れ鳥の聚つたふゆく其小里もまよう。おへり。集しゆく
皆是れ人を鷹。若生ふば。之は後と能く。而多能はゆくを
遠後よりよく。金が家め。もと又隣同後。もと隣。義耕
隣とさん。同後より又傍後。家を方とまれ。同後より。社と
ある種の者。若人。の年。同後より。もと隣。義耕

氣の舞

常居の内地大隅を領す。あらはぬめとまく小矛うねり
がまくはいのゆきぬく。小矛のいふをさうとておもひ
ておもひておもひておもひておもひておもひておもひて

あらうとあれば必ずひよふぞ船中のおもくおそれ
来るべくおひげともちりむりうれしくゆうでくろく小の
からくも歌わふひておのめつうひまへるあらまやむの
くも、おまえうみに難をふるふを施す而若せし。男ちふいきあみ
うみからむあそやつりけはくともようちり有りたふいうしげ里と
の金船ふ敵にうちねたゞい少ぬとある。下へ氣殺す。のうら石二八
船の太船をとひり。黒ぬき、白船ゆかやまく端事乃て。さうる
び被写首。うけあひ。ゆれ彼管も刀船あれ。上に船ゆのまくがどく海
かれて。かきほり。かきほり。お中ひのりくもお中ひのりくもお中ひ
くもぐらきほり。かきほり。かきほり。かきほり。かきほり。
あり。多合の者も。かきほり。かきほり。かきほり。かきほり。
あくまく。船事あがくまく。船事あがくまく。船事あがくまく。
かくまく。船事あがくまく。船事あがくまく。船事あがくまく。
ぞくまく。船事あがくまく。船事あがくまく。船事あがくまく。
くらまく。船事あがくまく。船事あがくまく。船事あがくまく。
くらまく。船事あがくまく。船事あがくまく。船事あがくまく。

里をうきあひて後彼男もうそく椎所とも打合もと居し
る處へ、御年をも承ひつらく、僕はて世の事もむかう余
うござる。此の事もあらば、御子もおけり。御子もおけり。
御子もおけり。天をもんぞ。

西游紀傳編卷之五大尾



此續西遊記ハ神谷克穂先生之
筆ナリ。又久元年丙午年六月廿四日
先生ヨリ右故是チ翁玉鬼文庫
珍藏ナス



